

兵庫津遺跡第36次発掘調査概要報告書

-神戸市兵庫区北逆瀬川町におけるマンション建設に伴う発掘調査-



2006年 神戸市教育委員会



序

兵庫津遺跡は神戸市の港湾地区の西側に位置し、文献史料などにより古代から瀬戸内航路の終着点として重要な港であったことが窺い知れる「大輪田の泊」・「兵庫の津」を指している。近年、奈良時代の港湾施設に伴うであろう溝の検出や、中世の藏跡、火災により焼失した近世の町屋など、徐々にではあるが兵庫津の町の様相を示す資料が姿を現しつつある。兵庫津遺跡の様相を知ることは、港町に象徴される神戸の歴史を知る上で非常に重要なものといえる。

本書は兵庫大仏で有名な能福寺の西側に位置する北逆瀬川町での近世寺院の発掘調査の記録である。礎石建て堂舎と墓地、多量の遺物を投棄した土坑など、貴重な文化財の発見があった。江戸時代には人口約2万人を擁したとされる“都市一兵庫津”の中で、人々の心的な拠り所として、また、人生の終焉の場としての寺院の発掘調査は、都市としての「兵庫津」の一侧面を語る重要な要素と考える。本書が近世都市の研究における一助と成ることを期待したい。

神戸市教育委員会文化財課



写真1 調査地南西上空より

【能福寺兵庫大仏の後ろ、現在はビルが多く立ち並び、その隙間に海岸線が見える】

例言

1. 本書は、神戸市兵庫区北遊瀬川町1丁目で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の概要報告書である。
 2. 現地での調査は、平成17年2月14日から平成17年4月3日の期間で実施し、神戸市教育委員会文化財課 藤井太郎が担当した。遺構図の作成は、ラジコンヘリでの空中写真撮影、及び岡化作業を(株)ジオテクノ岡西、(株)ジオソリューションズに業務委託し、その他、空撮で岡化できなかった遺構の実測、断面図の作成、ならびに地上写真撮影は藤井がおこなった。
 3. 遺物整理作業は、平成17年9月から11月まで神戸市埋蔵文化財センターにおいて実施し、文化財課 安田滋、藤井が担当した。遺物写真の撮影については、神戸市埋蔵文化財センターにおいて奈良文化財研究所 牛嶋茂氏の撮影指導の下、杉本和樹氏(西大寺フォト)が行った。
また墓より出土した白色物及び赤色顔料の材質分析を(株)パレオ・ラボに委託した。
 4. 本書の執筆は、P.30「鉛滓の分析」の項については文化財課 中村大介が担当し、現地での鍛冶炉の検出状況、及び金器類、木製品については中村の助言を得て、その他の項目とともに藤井が担当した。出土遺物ならびに岡面・写真などの記録は、神戸市埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。
 5. 発掘調査の実施ならびに本書の刊行に際しては、事業主であるファースト住建に多人なるご協力をいただいた他、現地作業では(株)栗本建設工業にご協力いただいた。記して感謝します。
 6. 「兵庫津絵図」ならびに「寺社員數御改帳」の内容及び写真の掲載について、神戸市立博物館 高久智広氏より有益なるご助言とご協力をいただきました。また下記の方々にお世話になりました。記して深謝いたします。

池田千冬氏、鶴尾寧一氏

—三〇六—

はじめに	1	S K05からの出土遺物	
今回の調査について		S X06からの出土遺物	
兵庫津遺跡について		S K301からの出土遺物	
兵庫津遺跡での発掘調査から—近世—		鍛冶炉	
第1造構面	4	第4造構面	31
建物基礎		柱穴	
敷地層面の土坑		落ち込み	
礎石		溝	
第2造構面	8	俵積み造構	
建物地業（基礎工事）痕跡		S E02	
地鎮具		調査区南半で検出された墓地	38
第3造構面	10	墓地の形成	
検出遺構		調査区での検出状況—墓の諸相—	
各造構からの出土遺物		豊富な副葬品	
S X01からの出土遺物		墓副葬品内容物の材料分析	46
S X02からの出土遺物		まとめ	48
S D02からの出土遺物		あとがき 主な参考文献 報告書抄録	50

□はじめに

○今回の調査について

今回の調査は、神戸市兵庫区北逆瀬川町1丁目での共同住宅建設に伴う事前調査である。調査地は兵庫津遺跡のほぼ中央に位置し、昭和38年までは時宗長楽寺の地所であり、寺の移転後は飲料会社の事務所・倉庫となっていた。

今回、当該地でマンション建築が計画され、敷地の内、建物の建設により埋蔵文化財に影響を及ぼす約800m²を調査対象として実施した。

調査区内は從前建物による搅乱がひどく、特に南側5分の1と北東部5分の1の範囲は既にほとんどの部分で遺構面が失われていた。搅乱により、調査地の全体像の把握は非常に困難であったが、中世末・江戸時代後期、幕末～昭和時代初期までの3時期（第1～4遺構面）の遺構面が確認できた。

第1遺構面では寺院建物（堂舎）と墓地、第2遺構面でも墓地の検出が続き、第3遺構面では大量の遺物が出土する大形の落ち込み（ゴミ穴）などを検出した。続く第4遺構面では中世末の柱穴などを検出した。

調査は北側で現地表下60cm、南側で現地表下約1mまで堆積する盛土層を重機により除去し、以下は人力により遺構・遺物の検出に努めた。



図1 調査地位置図 (1:5,000)

調査区内の土層堆積は、中央部で上層から茶灰色砂、灰色砂、褐色・灰茶色砂、白色砂の順に堆積し、これが基本的な層序となる。白色砂の上に茶色系の砂が、それぞれ20～30cmの厚さで堆積する。周辺ではそれぞれ堆積層に違いがみられ、これは西側が溝、東側が古い段階から下がり地形となっており、この旧地形を整地したこと、また北側と南側では建物造営と墓地の形成により異なる整地が行われたことに起因するものと考えられる。



写真2 調査作業風景1

調査地では、北側でまず建物基壇が確認され、南半で墓地が確認された。墓地は下層の一部の墓を除き、北側半分からは検出されておらず、基壇の南辺よりも南側に区画されている。

墓地については後にまとめてこととし、それ以外の遺構、建物下層の大形の落ち込みなどについて遺構面毎にその状況を先述する。



写真3 調査作業風景2

○兵庫津遺跡について

神戸市兵庫区の臨海地区に位置する兵庫津遺跡は、兵庫津を描いた現存する最古の絵図である「摂州八部郡福原庄兵庫津絵図」(1696年)（通称、元禄兵庫津絵図、以下元禄絵図）に描かれた範囲を指定している。東西約1.2km、南北約2.2kmの範囲に及び、神戸市域内でも広域の遺跡に属する。

平安時代後期の文献である「行基年譜」(1175年)には奈良時代・天平年間(741年)に「大輪田船息」と呼ばれる港湾施設を修築した記事があり、港湾施設を整えた船舶の停泊地の存在が伝わる。

2003(平成15)年に兵庫区芦原通1丁目で実施された第32次調査では、港の歴史を考える上で重要な成果があった。奈良時代(8世紀)から平安時代(10世紀)まで機能していた東西方向の2条の溝が検出されたが、溝の性格は建物の区画溝や排水施設の一部と思われ、当時の海岸線に近い場所、出土遺物に縁釉陶器などを含む点から、公の港湾施設に伴う可能性の高い遺構と推測されている。兵庫津遺跡での最古の遺構である。

平安時代には「大輪田泊」と呼ばれ、瀬戸内航路の基点として機能してきた。1173(承安3)年の平清盛による修築は、経ヶ島と呼ばれる防波堤(波除け)の築造などを行った大規模な事業と伝わり、これにより国内有数の港として、また日宋貿易の窓口として発展してきたとされている。しかし、この頃の遺構については判然としない。



写真4 摂州八部郡福原庄兵庫津絵図

(個人蔵・神戸市立博物館寄託)

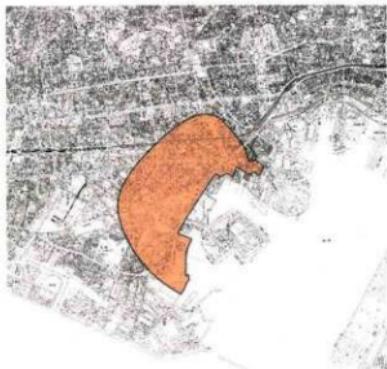


図2 兵庫津遺跡の範囲 (Scale 1:60,000)

中世には「兵庫津」の名で呼ばれ、文献により港はさらに活況を呈することが知られるが、戦乱の都度、重要な港口である兵庫津も幾度かの戦火に見舞われた。

近世初頭には池田恒興により兵庫城が築かれ、港町の性格に加え、城下町の機能を、その後には西国街道の宿場町の機能も合わせ、「都市・兵庫津」として発展してきた。発掘調査で出土する膨大の遺物などがこの発展を示すものであろう。

元禄絵図から読み取れる近世の兵庫津の町は、東に海を望み、海岸線の中心に御屋敷(兵庫城として築造後、尼崎藩領期には陣屋を設け兵庫奉行を派遣、幕府領となった後は勘定所となり大阪奉行所に属する)を置き、町屋は「都賀堤(外輪之堤)」と呼ばれる外郭と須佐の入江、佐比江浜に囲まれた範囲に発展し、町屋の外側には田畠が広がり、南の海岸線には松林の描写が見られる。

「元禄絵図」の中心に作図の基点となる白点があり、この基点が札場の辻で、折れ曲がるやや幅広の道筋が近世の西国街道となる。街道には町への出入口として北に湊川総門、西に柳原総門を設ける。町の東には古湊川が南流し、兵庫津の支配領域の東限となった時期もあった。江戸時代後期、人口は2万人に達していたとされており、江戸や大阪と比べようもないが、当時としては国内有数の大都市であったといえる。

○兵庫津遺跡での発掘調査から—近世—

兵庫津遺跡では現在（本書作成中の2005年末）までに40件近い発掘調査が実施されており、それらは国道2号線の共同溝や共同住宅の建設に伴う大規模な調査から、個人住宅の建築に先立ち、基礎部分のみを調査するという小規模な事前調査まで様々であるが、特に神戸市域にも多大な被害をもたらした兵庫県南部地震一阪神・淡路大震災以後の住宅供給を目的とした発掘調査などの進展に伴い、絵図や文献史料に頼っていた兵庫津の姿の復元が、克明に地面に刻まれている遺構や当時の生活を彷彿とさせる膨大な量の遺物から可能になりつつある。

近世の兵庫津における町屋の姿は、1998（平成10）年の七宮町2丁目における第15次調査で明確になった。兵庫津・北浜の豪商北風家の文書にも記される、1708（宝永5）年の大火で焼け落ちた町屋が確認され、壁土、瓦を大量に含む焼土層の下から、7～8棟の建物が検出された。間口4～6m、奥行きが14m前後で、片側に幅1m前後の土間をもち、壁は礎石列で隣家と接する。炭化物とともに中国産・肥前陶磁器をはじめとする日常雑器が大量に出土している。その他周辺の調査でも町屋跡、蔵跡、炉壇と思われる施設を有する遺構などが膨大な遺物とともに確認されている。また柳原惣門、兵庫城期の堀跡など兵庫津の町のポイントとなる地点での意義ある調査も実施されている。

今回の調査と関連した近世寺院やその周辺での調査では、2001（平成13）年の第26次調査が特筆される。

遊行僧一遍上人終焉の場として著名な時宗真光寺の堀跡の一部が検出され、「元禄絵図」に描かれた寺域を確定する根拠となり、同時に絵図の描画の精度の高さを証明するものであった。堀の埋土からは方孔や周囲に鋸造時のバリのついた天保通宝銭も出土している。

寺院の建物（本堂）と墓地の検出は、2004（平成16）年に実施した日蓮宗法蓮寺での庫裏新築に伴う調査（第33次）で、旧本堂の礎石と多数の埋葬施設、墓地の整理が行われた痕跡が検出された。絵画史料や文書により寺院の様子が一部で判明しているが、発掘調査でその姿を現すようになったのは極最近のことである。



写真5 第15次調査 検出された町屋



写真6 第26次調査で確認された真光寺の堀跡



写真7 第33次調査 法蓮寺 硏石と墓地



写真8 第33次調査 法蓮寺 五輪塔集積遺構

□第1造構面

盛土を除去した段階で、調査区北半において建物（堂舎）礎石とこれを囲む石列（石垣）をもつ基壇、土坑4基を検出した。

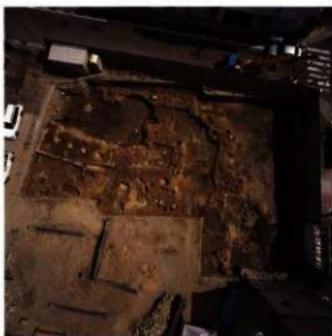


写真9 第1造構面空中写真（西上空より）

○建物基壇

調査区の北端に位置する建物（堂舎）跡は、大部分を擾乱により失うが、検出した礎石より、その規模は南北3間約10m、東西は擾乱の東際に僅かに残った礎石下の地業痕と考えられる砂の堆積から復元すると約15m、5間の規模を有するものと考えられる。

礎石の周囲を囲む石列は、コの字状に残っており、石列の北・西辺で上下2段を検出し、石積み、盛土の状況から新旧2時期に分けられる。上段石列は下段の石列の上に間知石を並べたもので、間知石の周辺からは江戸時代の陶磁器も出土しているが、間知石列の西側、瓦を立て並べて通路とした整地層や石列の裏込めからはガラス瓶や銅線、近～現代の陶磁器が出土しており、明治時代を含むそれ以降の構築と考えられる。

下段の石列に伴う整地層面で検出した4基の土坑や石の裏込め土を含めた盛土層、礎石の隙間からは近世の陶磁器が出土しており、下段石列で囲まれた基壇は、江戸時代後期の構築と考えられる。基壇は、江戸時代に構築されたものに明治時代に新たに石積みを行い、礎石のほとんどは転用し、全体に嵩上げを行っている。

一部の礎石や石列は抜き取りや擾乱を受けており、石の下に部分的に砂の堆積がみえる。この砂の堆積は建物を造営する際の地業痕跡である（第2造構面）。

礎石の高さは、上段石列の盛土層の面で平石の天端がのぞく程度、下段石列面では底面が整地層面となる。

○整地層面の土坑

基壇の西側で検出した土坑は、いずれも平面長方形を呈する。長辺約1.5mを測るもの3基、約3mを測る大型のものを1基検出した。遺物の大半は瓦で、その他に陶磁器類や木製品などが出土した。



写真10 建物基壇一明治期以降（西南から）



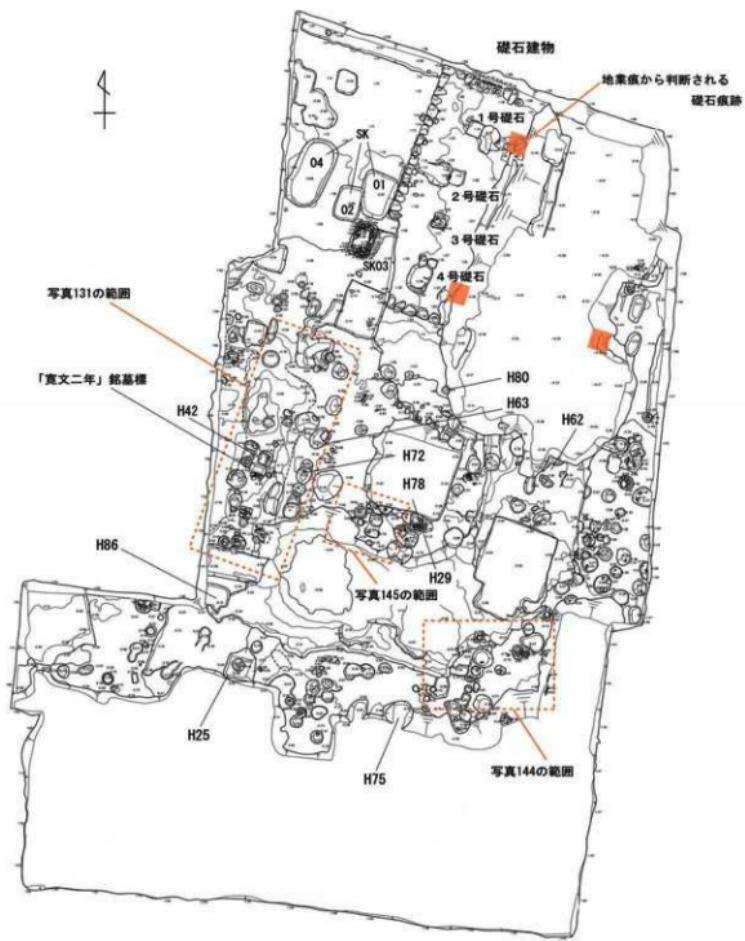
写真11

S K03

出土瓦

手前の軒平瓦の幅は25cm。

S K03からも陶磁器類の出土は少なく、ほとんど瓦で充填される。軒瓦を含む平・丸瓦の他に鳥食・鬼瓦片が出土した。



擾乱の影響が大きく、全体像が掴みにくいが、調査区北側に礎石建物（堂舎）、南半に墓地が形成され、建物と墓が重複することはない。建物の南西側で、墓坑が比較的整然と並ぶ様子が見てとれる。

図3 第1造構面平面図 (1:200)



写真12 第1造構面全景（南西から）

○礎石

礎石は天端の平石が確認されたもの3基、根石や砂の地業痕跡のみが確認されたもの4基の計7基を検出した。残りのよい西側の4基の礎石のうち、北西隅部の1号礎石は形状や質とも他の3基と異なり、上段の間知石に類似する。間知石が積まれた時期に、後から補われた感がある。その他の礎石はいずれも下段石列と同じ石質のものを用いている。3号礎石では平石を2石積んでいる。

一部の礎石の抜き取り痕では、一辺数10cmの平石を3~4個の根石で支える構造がわかる。下部の石は30~40cm大の割り石を基本に、やや大振りの石も用いて、安定を図りながら据えている。

南西隅の4号礎石は平石と根石の一部を失っており、横に抜き取り坑がある。この土坑の底では、石の沈下を防ぐために穿たれたと思われる杭状のピット5本を確認したが、この底面では杭材などは遺存しなかった。その後、第4造構面精査時に同様の5本で1組となる杭跡が確認された。位置的には4号礎石の下にあたる。上面で見えていた杭跡の下部と判断される。



写真13 1号礎石



写真14 3号礎石

写真15・16

4号礎石と杭の断面



断ち割りの結果、

先端を尖らせた杭は

径約10cm、礎石の下端から杭先までの深さを復元すると約90cmとなる。



写真17

第1造構面全景

(北から)

□第2造構面

南半では第1造構面に引き続き墓地を検出した。北側では礎石・石列を配する基壇下において建物の造営に伴う地業痕跡を確認した。

空掘による固化時には下層造構を検出していたため、北側の建物地業痕跡については表せていない。南側では上層に引き続き墓地を検出した。一部の墓地は上層から掘り込まれたものも含まれる。

○建物地業（基礎工事）痕跡

建物基壇及びそれに伴う西側の整地層を掘り下げたところ、建物基壇造営に際しての地業痕跡を確認した。この面を第2造構面としたが、基壇下部は第1造構面、また第3造構面の落ち込みの均しは第2造構面での整地作業に伴うため、北半の建物造営は第1～3造構面でそれぞれ関連する。



写真18 磚石下の溝と砂の堆積（東から）

礎石下に巡らされる溝内の砂は、柱・壁材などの重量物を支えるため、硬く締まった状態である。



写真19 磚石下の根石検出状況（南から）

基壇を形成するのはやや粘り気のある茶褐色砂で、部分的に白砂を帯状に挟む。これらを除去した段階で、擾乱により第1造構面の礎石下などで見えていた白砂の入る布掘り溝を検出した。溝は石列と礎石下にのみ認められ、礎石下の溝は、石列下の溝よりも一段深い位置にある。

礎石下の溝内に砂を充填させ突き固めた後、根石を配し、砂を積み上げ基壇を形成する。基壇の成形中に外側の石列下に砂を敷くが、直接石列が砂に埋没する状況ではない。全体に砂の綿まりは良いが、胴突などの道具の使用や、先述した根石下の杭に横木を架したような痕跡も認められず、地業痕跡のみではどれほどの規模の建物があったかは不明である。

石列下の溝内では砂を除去した段階で礎敷きが確認され、乗轍と土師皿がまとめて出土した。地鎮具と考える。



写真20 基壇形成層と整地層の断面（南から）

整地層と砂を除去した状態。直下に大形の落ち込みであるSX01の輪郭が見えはじめる。



写真21 砂底と礎、地鎮具の出土状況（南から）



写真22 地鎮具の出土状況一近景（西から）

○地鎮具

秉燭1個と7枚の土師皿から成る。

土師皿の口縁には灯心痕の煤が付着しており、灯明皿（油皿）として使用されていたものである。表面には透明釉が施される。1のみ口径約10cmを測り、他2～7は6cm前後の径を測る。底部には回転糸切り痕が明瞭に残る。

秉燭は高さ12.5cm、台形の脚付のものである。素地は橙色で、表面には黒色釉を呈する陶器製である。内部は灯油のためか脆く、剥離しやすくなっている。



写真23 地鎮具（秉燭と灯明皿）

これらが地鎮具である根拠は乏しいが、まとまって出土している点、出土位置・層位から推測される。

また直下には後述する大形の落ち込み（S X01）が存在するが、その最上層からは片面が金色を呈する鏡が1点出土している。地鎮に伴う「撒錢」とすれば、その可能性を高めるものである。

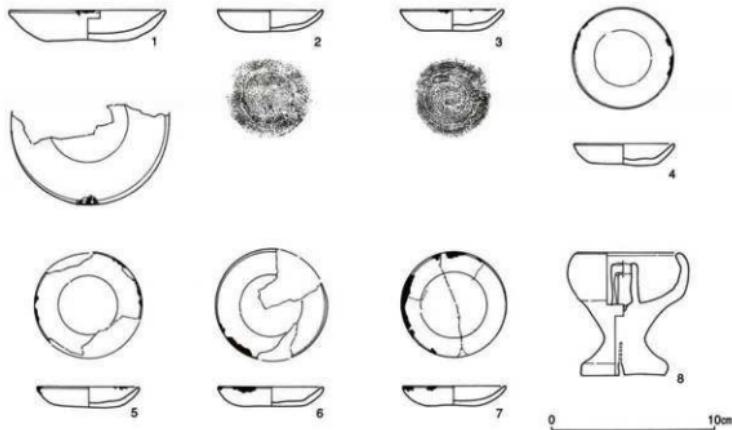


図4 地鎮に伴う遺物の実測図（1～7：灯明皿、8：秉燭）（Scale 1 : 3）

□第3造構面

標高約0.2~0.8m、白色砂層、灰茶色砂層で形成される南への緩やかな下がり地形の造構面である。

調査区の北半で大型の落ち込み1基と土坑3基、鍛冶炉2基、溝1条、井戸1基を検出、南半で溝状の落ち込み1基と土坑1基を検出した。



写真25 第3造構面空中写真（北側上空より）

○検出造構

S X01

調査区の北側中央部で検出した大規模な落ち込みである。第1造構面で検出した建物基壇の下に位置し、基壇地業層を除去、落ち込みの輪郭を確認した段階で前述の地鎮具が出土している。埋土の上部は地均しが行われている。

落ち込みの規模は、搅乱の影響を受け、全体を把握するには至らないが、搅乱際に広がった遺物も含めると、東西約6m、南北約12m、深さは最深部まで約80cmを測る。埋土の大部分は黒褐色を呈する粘土質の強い土であるが、部分的に瓦や石材片、貝のみが堆積する部分があり、これらには土が混じらないことから、一括投棄の感がある。



写真24 調査区北半空中写真（東側上空より）

S X01からは今回の調査で出土した遺物の3分の2以上を占める量が出土しており、陶磁器・土器などの

供耕具をはじめ、金属製品、木製品、石製品、土製品、瓦など、それらは非常に多岐にわたる。

S X02

調査区南西で、調査区内ではL字状となる落ち込みを確認した。北にのびる東辺の断面は鋭角なV字形となるが、南辺の断面の形状は箱形、南東角部では深さ約15cmと非常に浅くなる。調査区外となる西側での状況が不明なため、全体の形状は明らかでない。

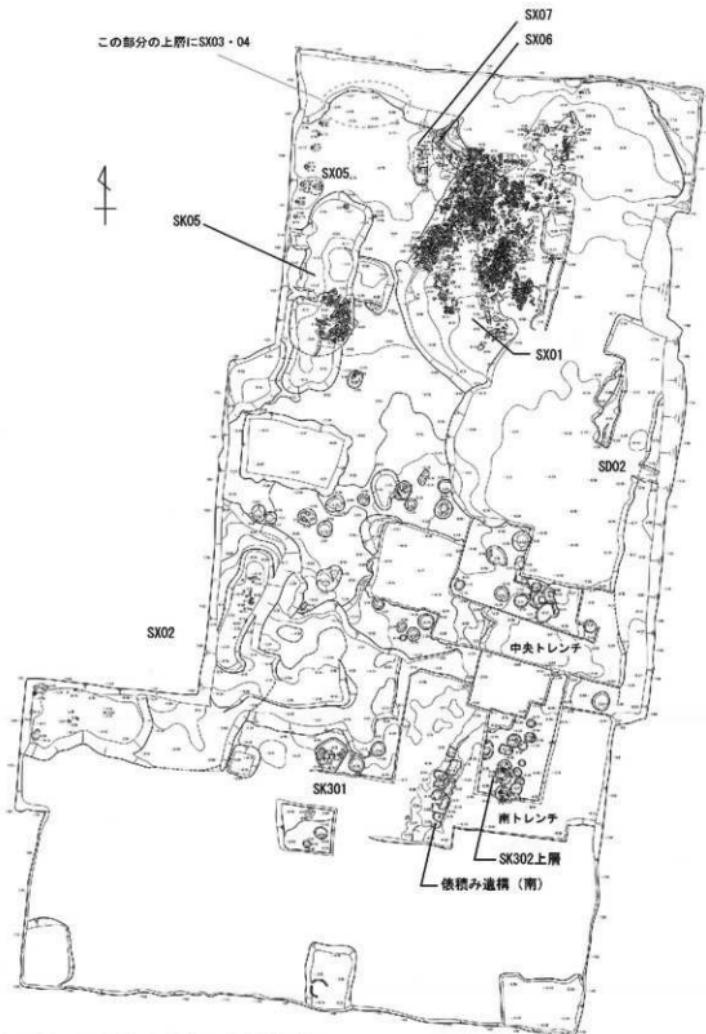
S X06・07

S X01西側肩部の北隅に位置する土坑である。S X06は断面が浅い皿状を呈する土坑で、搅乱により北側を失うため規模は不明であるが、径約2mの円形の土坑と思われる。S X01との切り合いは明確でない。埋土はS X01と同様、黒色の粘土質の土で、炭が比較的多く混じる。

S X07は隅丸長方形の土坑で、S X06と同じく埋土に炭を含むものである。肩部の落ち込みは垂直に近く明瞭に下がるが、検出した土坑の深さは10cmと浅い。

S K05

S X01の西側で検出した南北約8m、東西約2mの長方形の土坑である。南北両端部の深さは30~40cm、中央部分がやや深く70cmを測り、遺物も中央に集中する。埋土は濁灰色砂を基調とし、中間に炭層を挟む。南側に茶褐色の縞りの悪い砂層が溝状に堆積し、連続して落ち込みとなるようだが遺物の出土はなく、造構としては判然としない。



古層の墓、やや深度のある墓の一部が残存する。

調査区の東西両端はSD02、SX02の2つの遺構により下がり地形となり、北側には大形の落ち込みであるSX01が存在する。北東部にある擾乱のためにSD02とSX01の関連性は明確ではないが、SX01下層埋土もシルト質であり、一連の下がり地形を形成していた可能性がある。

図5 第3遺構面平面図 (1:200)

今回の調査により出土した遺物の大半は、第3遺構面において検出した遺構から出土している。それらは非常にバラエティー豊かな生活道具などであり、近世の兵庫津の町に暮らした人々の様子を物語る。

○ S X01からの出土遺物

すべての遺構から出土し、最も出土量の多いのは、供膳具の中心となる食器である。肥前系陶磁器が大半を占め、その他、瀬戸・美濃系、京焼の出土量も多い。S X01からも落ち込みの最上層から下層に至るまで、出土している。また漆器椀も多く、箸の出土もみた。

調理具としては擂鉢、焙烙、鍋や土瓶などがみられ、調理器では焜炉類が多く、これに伴い、火・炭を扱う道具の十能や五徳、火鉢などの暖房具、灯明具が多数出土している。瓦類、陶製土管など建造物に伴うもの、多量の羽口と鉢津、様々な石製品、木製品、金属製品、用途の不明なものもある。概略となるが順に述べよう。



写真26 調査区全景（南西から）



写真27 S X01遺物出土状況（東から）

陶磁器

S X01からは多量の陶磁器が出土している。大半は肥前系である。碗、皿、小杯、猪口、鉢、蓋物、香炉、仏壇器、瓶、壺、壺、紅皿などの器種があり、染付を主に、色絵、青磁、白磁、瑠璃釉が少量出土している。

大型の製品の出土量は少なく、小・中型の製品が主である。皿・鉢とともに蓋付碗の出土が目立ち、特に青磁染付碗、網目文小型飯碗、菊花文筒型湯呑碗など、同じ法量、同じ文様をもつ飯碗や湯呑碗がまとまって出土する傾向が特筆される。青磁染付蓋付碗は外側が青磁、内面は染付で文様を描いた、日用品ではあるが上手の製品である。これらの製品の蓋の内面や見込みには花をあしらったものや松竹梅文が目立つが、その他の製品はコンニャク印判による五弁花が多い。碗は丸型を主とするが、口縁が外に反り返った端反形の碗もみられ、線・網目文などのシンプルな文様が目立つ。この他、僅かではあるが広東窓タイプが出土しており、大振りの碗のほか、高台に○×の意匠と龍宝珠を描いたやや薄手の上手の碗、赤絵碗も混じる。

見込みの五弁花、高台内の渦福には流麗な手描きのものもあるが、ほとんどは形が崩れしており、高台には「太明成化年製」「宣明年製」「富貴長春」の銘も入る。

今回、S X01から出土した肥前陶磁には、おおよそ18世紀～19世紀代初頭に盛行する製品の特徴が認められるであろう。



写真28 遺物出土状況近景

陶磁器の他、播鉢、焜炉などの調理具（器）の破片や、漆椀、下駄などの木製品、瓦などの製品が出土するとともに、木屑や鉛錆、羽口など生産にかかる遺物も多い。



写真29

陶磁器などの出土状況



写真30

出土した肥前系磁器



写真31 小形の類似製品が大量出土

青磁染付の蓋付き碗や、口径前後10cmの飯碗、口径約8cmの湯呑（筒型）碗など、文様や法量が類似する製品が多い。

写真34

肥前磁器を含む

遺物の出土状況



中皿の出土状況。蛇の目高台釉剥ぎによる量産

タイプの製品が主流。内外の染付文様は丁寧。



写真32 焼繼した製品と錦書磁器



写真33 第33次調査出土の焼繼製品（参考）

焼繼痕跡を残す製品。大形の優品に多い。



写真35 出土陶器

同一器種の大量投棄という状況の中、一部の製品に焼繼の痕跡が認められる。通常、焼繼は高級品に多く、第33次調査では大鉢や色絵皿の高台内に、金泥による焼繼印も認められた。今回の調査では焼繼例は少なく、日用品にみられる。文献に「焼繼師なる商売が流行…」との記述もあり、鉛ガラスにより簡便、安価な玉維ぎが行われたのであろう。但し、雑器の大量投棄の状況もあり、器の扱いについては相容れない部分がある。

出土陶器

肥前系陶器には白化粧土の刷毛目が特徴的な浅鉢や片口があり、瀬戸・美濃系では肥前のコンニャク印判による五弁花を表現したものや、それらを模した六曜文をもつ中皿、黄・黒瀬戸の天目碗や向付、腰高茶碗や装飾性を重視した小型器種が多い。

その他、備前や丹波産と考えられる焼締陶器の鉢、徳利などが出土、施釉陶器や京焼（風）の小碗など、陶器類の出土量も多い。

調理器と調理具

食材の加工（調理）を行う道具は様々である。ここでは土器や陶器製の道具、包丁などの金属製品が出土している。調理に用いる容器類である調理器、そしてこれら調理器を加熱する調理具に大別できよう。

調理器

擂鉢

調理器の大部分を占めるのは擂鉢である。焼締陶器の中に、やや軟質の土師質に近い焼きのものがある。



写真36 擂鉢

写真中央、復元できた擂鉢の径は約24cmである。

一般的な分類（内面底部の摺目パターンによる判別
一堺産：三角、明石産：放射パターン）からすれば堺産が大半を占めるようであり、次いで明石産が多く、備前、丹波（同心円十クロス）、瀬戸・美濃系は少量である。備前系にある堺、明石産の擂鉢は酷似しており、その差異は肉眼観察のみでは判別が難しいとされる。今回の出土品でも摺目パターンと胎土や成形法に画一性は認めにくい。

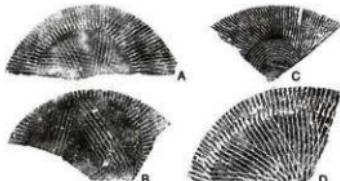


図6 摺目パターン (A・B: 三角 C: クロス D: 放射)

焙烙

焙烙は欠損部分が多く、全体を復元するに足る量は出土していないが、おおよそ径30cm前後、深さ5cmほどのものが多いようである。一部、吊り下げ用の耳の付くタイプも存在するが既に形骸化しており、焜炉などにかけて食材を煎る用途が一般的である。



写真37 焙烙・鍋

土瓶類

炉や火鉢、焜炉にかけ、日常的に比較的簡単に湯を沸かす際に用いられたのであろう、多量の破片が出土している。



写真38 土瓶類

加熱調理具

加熱調理のための道具の中心は焜炉類である。

中でも今回、調理具としたものでは舟竈の出土率が極めて高い。

舟竈は屋外に携帯し、使用するのが通例とされる。

江戸などでは星形船に積み込んでの宴会などの様子が浮世絵などから窺えるが、今回の出土品はどのような場所で用いられたのであろうか。



写真39 出土竈類

後2点は大形の舟竈。最奥の舟竈は完形に復元できたもので、上端の鍋などを置く部分の径25cm、器高25cmである。

その右前の小型の舟竈は、茶を沸かす際などに用いられたと思われる。上端径8cm、器高9cmを測る。手前の破片は炭の入れ口となる張り出しの部分である。

破片も相当数にのぼり、数の多さを物語る。多くは内側に煤が付いている。

また角型、円筒型の焜炉がそれぞれ1点復元できた。

角型焜炉は上端、鍋掛け用の開口部径8cm、器高23cmを測り、四隅に胴部と一体化した脚が付き、火口、把手に丸みを帯びた直方体の粘土を貼り付ける。底部を失っているが、あまり使用痕跡はみられない。



写真40 角形焜炉



写真41 円筒形焜炉

上端復元径20cm、底径13cm、残存高18cm。

鍋掛け突起は本来3つあったであろう。体部内面下位に目皿などを受ける突起をもつ。

写真42

焜炉に伴う破片
(鍋掛け突起・脚)



暖房具

暖を取る、あるいは湯を沸かすなどの簡単な調理を行なう道具として、火鉢、炉形土器が出土している。また炭を足す、煙を搔きだしたりするための十能や、鍋などを火にかける際に用いる五徳が出土している。



写真43 火鉢類

火鉢の大半が瓦質である。軟質の土師質の火鉢もあるが、数は少ない。器高の低い円形のものを主流とし、体部が内溝し、三つ脚が付くタイプ、高台のめぐるタイプもある。

上の写真、左手前とその上の白っぽい破片は風炉の一部で、茶道の手前で用いられる。表面は丁寧に磨かれ、円形の臺や四葉形をした透かしをもつ。

下の写真中には装飾として獣面の貼り付けや千鳥の刻印があり、獣脚をもつものも含まれる。表面は非常に細かく磨かれ、平滑である。



写真44
火鉢片



写真45 炉形土器と土製蓋

木製の枠などに入れて用いるよう開口部に縛が付く。体部は薄い粘土板で箱状とする。茶道の炉段や掘炬燵の落としとして使用したとも考えられている。

また瓦質、土師質の蓋が出土しており、サイズからみると炉形土器に伴うものであろうか。



写真46 十能・五徳

瓦質、土師質の製品である。十能の把手には中空、中実のものがあり、底面も平らなものと凸曲するものがある。

特異な瓦質土器—炭を扱う道具？

基壇層、建物の地盤層を除去した段階の整地層中で瓦の溜まりの中から特色ある遺物が出土している。

写真50・51は底部に多数の穿孔をもつ瓦質土器で、把手が付く。内面にはカーボンが厚く付着する。

その横からは写真52の、胴部に把手、あるいは獸面や菊文などを貼り付けたかと思われる刻目を残す瓦質土器が出土している。

穿孔土器のそばからは

瓦質土器が多く出土して
いる。炭を扱う道具の一
括投棄であろうか。

写真49

穿孔土器周辺の
遺物出土状況



写真47 カーボン付着土器と目皿

内面にカーボンが付着したものはほとんどが瓦質である。
写真最奥のものは底部に多くの穿孔をもつ。明確な用途は不明であるが、炭を扱う際に用いたかと思われる。



(内面)



(外側)

写真50・51

穿孔土器

底部の穿孔は外側から施され、内部に粘土が粗くはみ出しているが未調整。器高約23cm、口縁部に切り込みをもち、大形の把手が付く。半分しか出土しておらず、両方に把手が付くのか、口縁の欠けは一部なのか、などは判断できない。



写真48 穿孔土器の出土状況と整地層の断面



開口部上部は緩やかに湾曲する。形は炭もらいに近いが、やや大きすぎる。

炭扱い、手焙りなどの用途が想像されるが、不明である。

写真52

用途不明の瓦質土器

灯火具

先に地鎮に伴う灯明皿、秉燭のセットがみられたが、日常生活の中でも多量の灯明具が使われたと思われる。土師器皿に加え、透明釉を施した油皿や受付皿、秉燭など灯火用の専用器種が加わる。



写真53 油皿の出土状況



写真54 油皿と受付皿？出土状況

通常の土師器皿を灯火具として使用するものも存在するが、ほとんどの専用の油皿として油脂を弾くよう透明釉が施される。受付皿とセットで用いることにより、上皿である油皿の底部を汚さない工夫がされており、受付皿には油皿を受ける円堤状の立ち上がりの1箇所に台形や円形の抉りを入れるか、穿孔し、灯心を伝って滴り落ちる油を集めめる構造となっている。

出土する灯火皿の大きさには、径7cm前後の小形のものと、径11cm前後の大形の2種類が確認でき、これに合わせて受付皿の大きさも2種類に分類できる。

一般的な受付皿の変化は無脚から有脚へ、受け部の立ち上がりは次第に低くなる傾向にあるとされる。

また秉燭は受けを用いる油皿よりも安定性が良く、携行に適し、さらに小形ゆえに行灯の光源など多様な使用形態が可能であった。



写真55 油皿と受付皿（無脚）、秉燭と油壺片

口縁に灯心の痕跡であるタールが残る。右手前の2枚重ねの土師皿は、油脂により固まっている。中央の油壺は注ぎ口を失うが、滴り落ちた灯油を壺の中に戻す肩部の突起と円孔がみえる。秉燭の灯心を支える部分も多様である。



写真56 油皿と受付皿（有脚）

石製品

硯や砥石といった日常生活で用いるもの他、底面からは一石五輪塔と製作の際に出土した石材片が集中して出土している。石材片の堆積には土が混じらず、一度に投棄されたか、寺院内、あるいは近辺での継続的な製作作業があったことが窺える。



写真57 硯と水滴

硯は海・陸の部分ともにかなり磨耗しており、使い込まれている。奥から2個目の硯の長さは18cmである。右上の水滴は型物で、鶴を表したものか。



写真58 砥石

用途に応じ、様々な大きさがある。



写真59 石材片(屑)出土状況

花崗岩の粗削りの石や細部調整で出た小さな石屑が一塊になって出土している。



写真60 石材片堆積断面

断面内にもほとんど土が堆積せず、一括、または近辺から継続的に同位置に投棄された感がある。



写真61

一石五輪塔出土状況

手前の2基は花崗岩製、奥は砂岩製である。前者は凹凸が明確な作りであり、後者は扁平な形態となっている。

木製品



写真62 出土木製品



写真63 赤塗り鞘状製品出土状況

残存長約25cm。仏具であろうか?



写真64 差歯（陰卯）下駄の出土状況

他に連歯・剃り下駄も出土。

漆椀、蓋を中心にかなりの数の漆器が出土している。陶磁器類の出土量も多いが、食器としての漆椀の使用量が多かったことが窺える。木製品が残りにくいことを考えると、細片となったものや漆皮膜のみが残っていた状況から、さら供膳具の中で漆製品の占める割合が高かったことが想像される。碗類の漆塗膜は一層のものが多いが、折敷や曲げ物の一部と考えられる製品の一部には複数回の塗りが行われたと思われるものがある。

寺院内、あるいは寺院に近接する落ち込み（ゴミ穴）の性格を想像させる出土品としては、仏を浮き彫りし、金箔を施した長さ7cmほどの木片（写真62の右手前）や赤塗りの鞘状製品がある。

この他に多数の箸や平刷毛、栓など日常生活に伴う製品、また玩具では様々な形状の木刀の鍔が含まれる。一部が加工された木材片の他、製品の出土する場所の周辺からは木屑の出土も多く、前述の石製品と同様、一部の製品は付近で製作が行われていた可能性が高い。SX01は生活ゴミの捨て場であり、製作廃材の投棄場でもあったと考えられる。



写真65 漆椀の出土状況



写真66 刷毛の出土状況

周辺からは板材や綱も出土している。

金属製品



写真67 出土金属器

S X01出土の金属器には錢貨の他に、寺院内の建物に伴う金具（釘、蝶番、釘隠しなどの飾金具）が出土しているが、その量は少ない。その他には火箸、匙、楔、庖丁などが出土している。



写真68 包丁

またS X01からは10枚ほどの錢貨が出土しているが、この中に1708（宝永5）年に通用を開始した宝永通宝が1点、磨耗のため全体の文様は不明であるが、円形の壓押しの残る紋切錢と思われる絵錢が1点と、さらに今回の出土錢貨の中で最も特殊なものとして、片面が金色を呈する錢（金色錢）が1点含まれる。

金色錢は、金色面の裏面に「文」とあったが、金色面は平滑であった。レントゲン撮影の結果、寛永通宝

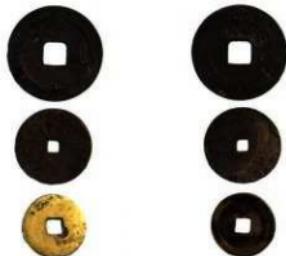


写真69 特殊銭貨

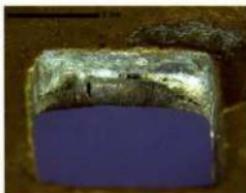


写真70
貼り付け銭
マクロ写真



写真71
同上
レントゲン写真

の文字は読み取れたが、通常の倍の厚みがあり、観察と金色面の成分分析を行ったところ、銅と亜鉛の合金である真鍮を貼り合わせていることが判明した。接合面には樹脂状の接着剤の痕跡ではなく、真鍮面の裏面に二次的な被熱状況がみえることから、低温で鋳合せたものと考えられる。方孔断面に擦痕が認められ、はみ出たであろうバリを磨いたものと考えられる。金箔を施した錢を、棟上げの際に撒錢や記念錢とすることは広く知られ、金色錢も前述の地鎮具と同様、S X01の最上層から出土しており、同様の性格を有するものかと思われるが、特殊な方法で製作されたこの錢の実際の用途、性格は何だったのだろうか。

焼塩壺

焼塩壺の出土量は極僅かである。表面には生産者、または生産地を示す刻印がある。

粘土板の上に体部を積み上げて作る輪積み成形と芯の回りに粘土板を巻きつけて円筒を作り、その一端に粘土塊を詰めて底とする板作り成形のものがみられる。



写真72 焼塩壺（左：壺 右：蓋）

最奥の壺に「泉見（？）湊」の刻印がみえ、
その前の破片には「泉湊伊織」の印がある。



図7 焼塩壺 刻印拓影 (Scale 1 : 2)

蛸壺一植木鉢に転用された蛸壺

蛸壺は器高20cm前後の真ダコ壺である。蛸壺として利用された後、底部を打ち欠いて植木鉢に転用された。この他、長胴の壺もあらかじめ底部を薄くしており、植木鉢への転用が意図されていたようである。



写真73

蛸壺と植木鉢

土製品・墨書のある遺物

軽石製の浮子や土錘、土製・陶製・瓦質円盤など、様々な遺物が出土している。数は少ないが墨書のある土製品、陶器類も出土している。



写真74

土製品各種



写真75 墨書の

ある遺物

瀬戸・美濃系の碗や蓋の底や内面、ミニチュア土製品の底や内面に数字や名前と思われる墨書がみえる。

瓦類

瓦質穿孔土器などの瓦質土器の周辺からまとまって瓦が出土している。丸・平瓦に加え、棟瓦の出土量も多い。小形の軒丸、意匠瓦片、道具瓦片もみられる。



写真76 出土瓦

後列軒丸瓦の径14cm、手前棟瓦の幅は20cmである。

陶製土管

一群の遺物の中には陶製土管も含まれる。受け側、差し込み側の状態も判明しているが、全体の大きさが判るものはない。土管の内径は11cmである。



写真77 S X01出土陶製土管

これらは寺院内の建造物を破棄した際に投棄されたものと思われる。

用途不明—線刻をもつ瓦質円盤

様々な遺物が出土したS X01からは、用途の不明の遺物も多い。

その中で特に注目されるのが瓦質の円盤状の製品である。径5cm、厚さ1cmで両面に焼成前に刻まれた記号様の線刻をもつ。



写真78 瓦質円盤（左：A面 右：B面）

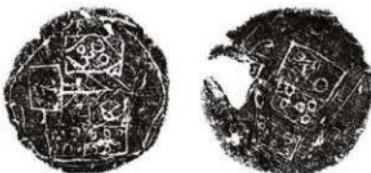


図8 同上拓影（実物の3分の2）

四角の組みの中に円が並び、一見するとサイコロを表すものと思われたが、仔細に観察すると「7」「8」を表す刺突がみえる。サイコロ様の数字を刻んだ同様の形態の玩具を想像すれば、麻雀パイが想起されるが、例えばA面左下の部分では上下4つずつの刺突で「8」を表しており、麻雀パイの素子（ソーツ）の「M」形の配置とは異なる。一般に今の麻雀スタイルが日本に伝わったのが明治時代の末、中国では清朝初期にはスタイルの完成をみていたという。19世紀代の遺物と考えられるこの円盤の記号が、麻雀（遊戯・文化）を伝えたものであれば、兵庫津への様々な文物の流入を考える上で非常に興味深いのだが、確証はない。今のところは何らかの符丁や、呪符的な内容を刻んだもので、形態からは面打様の玩具と想像される。

○ S X02からの出土遺物

調査区南西隅で検出したS X02と、墓域を挟んだ東端で検出したS D02はともに調査区外に広がるため、全容は把握できていないが、いずれも溝状に落ち込む遺構と考えられる。

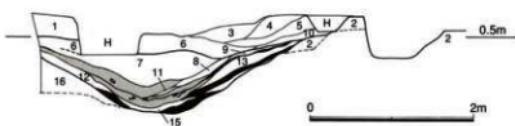
溝状部分の埋土のうち、下位に堆積した植物遺体層から遺物が出土している。



写真79 S X02全景（南東から）



写真80 S X02東辺の断面形態



- 1. 灰褐色粘土(権化)
 - 2. 灰色砂
 - 3. 棕色砂質シルト
 - 4. 棕色砂質シルト(小礫混)
 - 5. 明褐色シルト
 - 6. 灰色砂質シルト
 - 7. 青灰色シルト
 - 8. 灰色砂質シルト
 - 9. 灰褐色砂質シルト
 - 10. 灰青色シルト
 - 11. 黄色砂
 - 12. 灰褐色～褐色砂
 - 13. 灰色～明灰色砂
 - 14. 黄褐色砂
 - 15. 黑色シルト(黒塗りは黑色シルトの泥層)
- *トーン部分は植物遺体層

図9 S X02東辺土層断面図



写真81 出土した土器、陶磁器及び土製品

溝状となった東辺の下位の植物遺体層、南辺の底部に堆積した黒色シルト層から、ほとんどの遺物が出土している。

遺物には肥前系の陶磁器が多く、特に瓶類の出土が目立つ。その他、擂鉢、土師器の皿や碗、瀬戸・美濃系の碗類に加え、土人形、小杯など雑多なものが多い。

また東辺下部の植物遺体層には木屑が混ざり、塔婆、下駄、箸(朱塗り含む)、独楽などの木製品が多く遺存していた。



写真82 S X02木製品出土状況

下層植物遺体層より木製品が多く出土している。



写真83 S X02出土木製品

例り下駄、迷術下駄、差術下駄(陰卯・露卯)、様々な下駄の使用が想像される。

○ S D02からの出土遺物

調査区東端で検出した南北方向の溝であるが、調査区内での検出範囲は極僅かである。幅約2m、深さは約20cmと浅い。東に広がる大きな落ち込みの堆積の一部と考えられるが、肩部は不明。



写真84 S D02出土塔婆と加工木



写真85 塔婆などの出土状況

陶磁器類の出土は少なく、塔婆や加工木などの木片が溝の底近く、植物遺体層に含まれる。
一部の塔婆には不鮮明であるが、経文や戒名など墨書きがわずかに読み取れる。

○ S K05からの出土遺物

S X01の西側で検出した大形の土坑である。鍛冶炉に近接することから鉄滓の出土、堆積層の一部が炭の單一層となるなどの特徴をもつ。

遺物は一段深い中央の長方形部分、南の狭い範囲に集中する。土坑の南北両端は中央に比して浅く、遺物の出土は少ない。異なる落ち込みの可能性もあるが、両端の僅かな出土遺物に時期差はないようである。



写真86
S K05全景
(北から)



写真87
同上断面
(南から)



写真88 S K05から出土した土器、陶磁器

焰培、皿（灯明）などの土師器、肥前系の陶器では刷毛目模様の美しい瓶や、北側の浅い落ち込み部から出土した同様の皿などが含まれる。瀬戸・美濃系では壺や花生、火入れや灰入れが出土。その他、磁器碗、油壺、仏壇具、花生などの生活に供する豊富な器種がみられる。

○ S X06からの出土遺物

遺物の中に鉄滓、炭、焼土塊が含まれ、これは鍛冶炉に近接するためと思われる。日常生活で用いられた容器類の出土量も多く、大きさの差はあるが、遺構の性格は投棄坑（ゴミ穴）で、S X01と類似する。S X01と肩部を接するが同一遺構の可能性も含む。



写真89 S X06 断面



写真90 S X06・07遺物出土状況



写真91 S X06出土遺物

肥前系磁器では、やや大振りの草花文碗（くらわんか碗）や青磁染付、筒型湯呑碗が出土。

手前、土師皿と押し型づくりによる紅皿、土製円盤の奥の直方体の磁器は水滴で、半分以上を欠損するが、残った意匠から「障子の隙間から女性が覗く」絵柄であることがわかる。

○ S K301からの出土遺物

調査区の南端、中央部に僅かに残った遺構面で検出した、歪な楕円形を呈する土坑である。長径約1.4m、深さ30cmで、埋土の中や周囲には炭が広がる。

土坑内より甕が4個体と五輪塔の火輪を含む人頭大的石が4個出土した。周囲は墓地で、延べ煙管を副葬した早桶墓など深度の同じ墓坑が横にあり、上層墓地に伴う可能性の高い遺構である。

古い墓の片付けに伴うものであろうか。



写真92 S K301検出状況（北から）

鋳冶炉

第3造構面で2基、上層第2造構面で2基の鋳冶炉の炉床を検出した。厚さ20cmほどの整地層の上下でそれぞれ検出している。近接する造構から鉄滓や炭が多量に出土しており、北半で検出した落ち込み、土坑は一連の造構である可能性も多い。特にSX01からは多量の鉄滓や輔羽口、坩堝がしている。またSK05、SX06・07の3基の土坑の埋土には炭の單一層がある。

第3造構面調査時のSX01からの多量の鉄滓の出土、第2造構面上でのSX01の地均しに伴う堆積層にも炭や鉄滓が混入しており、検出状況、遺物の出土状況から、操業時期は2時期にまたがるものと思われる。

S X03・04

2基の炉床が隣接する。東側のSX03は径約60cm、炉壁と思われる焼土塊と輔羽口が底に溜まった炭層の上に落ち込んでいる。

西側に隣接、あるいは後出するSX04は径約30cm、周囲に大きく炭が広がる。炉床部分は小さい。



写真93 S X03・04検出状況 (北東から)



写真94 S X03 半裁断面
炉床の深さ30cm、床面に厚さ15cmで炭層が形成され
る。厚い炭層の上に流れ込んだ鉄滓と輔の羽口、坩堝
が落ち込んでいる。上部の構造は不明。



写真95 S X03・04・05 (鋳冶炉床) 検出状況とSX01

S X05

径約50cm、深さ20cm、下部にガラス質滓の混じる炭層が堆積し、中央上部に大型の滓が沈着する。隣接する径30cmの浅い掘り込みの大半は炭の堆積である。



写真96 S X05及び炭坑検出状況 (北東から)

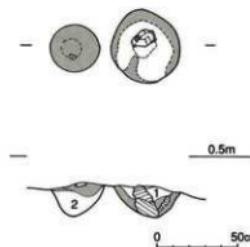


図10 S X05 断面図

良好な状態で鍛冶炉の炉床が遺存しており、近世の鍛冶作業を知る上で重要と考え、遺構の剥ぎ取り作業を実施した。



剥ぎ取り材の塗布



乾燥後、地面から
剥ぎ取る

写真97（2点）鍛冶炉床剥ぎ取り作業

鍛冶炉に伴う遺物

鍛冶炉の検出とともに、近接するS X01、SK05、S X06・07から鍛冶に関連する遺物が出土している。

S X01からは概算で150kgの鉄滓、鞴羽口、坩堝の出土をみた。



写真98 S X01の鉄滓出土状況

遺構内のほぼ全域から鉄滓が出土しているが、鍛冶炉に近いS X01の西壁際から流れ込んだ状況で出土している。またS X01、SK05の遺構壁面には、鉄分が沈着する箇所が複数認められる。



写真99 坩堝の出土状況



写真100 溶解した羽口の出土状況



写真101 S X01出土鍛冶関連遺物

鉄滓、鞴羽口、炉壁（部分）が多数出土。周辺で継続的に鍛冶作業が行われていたことを物語っている。

手前は坩堝で器高7cm、鳥帽子状の開口部は長径7cmを測る。高熱により器壁表層の劣化が著しい。

鉱滓の分析 S X01より出土した鉱滓より4点(写真102)を抽出し、B～Dの3点について断面サンプルを作成(写真103)、金属顕微鏡によるミクロ組織の観察をおこなった。結果、多様な金属組織が観察でき、B・Cは鍛錬鍛治、Dが製錬滓(炉外滓)であることが分かった⁽¹⁾。以下に所見を述べる。

Bは底面が鍋底状を呈する典型的な塊形滓で、上面には礫や木炭片、鍛造剥片が付着している。内部にはウスタイト(FeO)を中心とした結晶が見られ、その間隙にファイアライト(2FeO·SiO₂)が結晶する(写真104・105)。これらの結晶は1,200°C以上の温度域で生成される組織であり、鍛錬鍛治、特に高温による鍛接作業に伴うものであると推定される。

Cには縦羽口が残存している。羽口送風口の中心から滓上面までの高低差は4.0～5.0cmを測る。滓内部には木炭・礫を多く含む。羽口付近の表層にはガラス質滓が存在し、いっぽう内奥部にはファイアライト(2FeO·SiO₂)を中心とした金属組織が観察できた(写真106・107)。この状況は約900°Cの低温域で生成されたため、鍛接後の成形作業に伴って排出された滓と考えられる。

Dの表面には、炉外滓特有の墨色を呈する滑らかな流れ鐵が見られる。内部には金属鉄が塊状に存在する(写真108・109)。この状況から製錬滓であると考えられ、製品として搬入された製錬滓をここで精錬(大鍛冶)し、鉄製品へと加工していたと推測される。また木炭には針葉樹が用いられていたことが分かった。

参考文献 (1)・・・2003 真鍋成史「鍛冶関連遺物」『考古資料大観』7、鉄・金銅製品 小学館

2003 大澤正己「金属製品の成分分析」『　　』7.　　

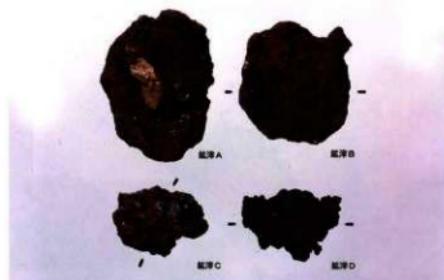


写真102 出土鉱滓サンプル

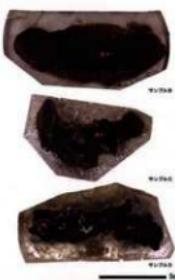


写真103 同左切断面



写真104 B-1 ウスタイト十ファイヤライト (50倍)



写真106 C-1 ファイヤライト十ウスタイト (180倍)



写真108 D-1 塊状金属鉄 (50倍)



写真105 B-1 ウスタイト十ファイヤライト (100倍)



写真107 C-1 ファイヤライト十ウスタイト (220倍)



写真109 D-2 炭化木材・針葉樹木口 (50倍)

□第4遺構面

第3遺構面と同一面、S X01とS X02に挟まれる範囲の白色砂面で15世紀代を中心とする柱穴22基、溝2条と土坑1基、落ち込みの肩部を検出した。

またS X01の東、S D02の下層にあたる溝底近くで護岸に伴う俵積み遺構と、調査区南端の擾乱内の試掘坑で平安時代の井戸を1基検出した。

○柱穴

柱穴は、径約30~50cmの円形のものを主体とし、一部に楕円形のものがある。建物は復元できなかった。埋土は灰色砂質シルトの單一層のものが多い。

出土遺物では土師器の皿が多く、細片となって出土している柱穴も多いが、残りのよいものでは復元すると3~5枚が1基の柱穴から出土する状況である。

S P07

径40cm、深さ20cmで円形を呈する。土師皿2枚が出土した。

S P10

長径約1m、短径約60cm、深さ20cmを測り、平面楕円形を呈する。埋土上層の灰色砂質シルト層からは遺物の出土ではなく、この層と下層の茶褐色砂の埋土の境目から土師皿5枚が出土した。

S P17

後出の柱穴に切られるが、径30cmほどの円形を呈するものと思われる。土師皿が3枚出土した。

S P22

長辺約60cm、短辺約50cm、深さ20~30cmを測る平面隅丸方形を呈する土坑である。埋土は茶褐色砂の單一埋土である。土師器皿の細片、鍋の他に瓦質の脚付き羽釜形ミニチュア土製品が1点出土している。



写真110 第4遺構面（南から）—第一3遺構面の一部と重複



写真111 S P10（東から）

最も残りがよく、5枚の土師器皿が出土した。
柱穴というよりは土坑に近い形状である。



写真112

S P07

(南から)



写真113

S P22

(南から)

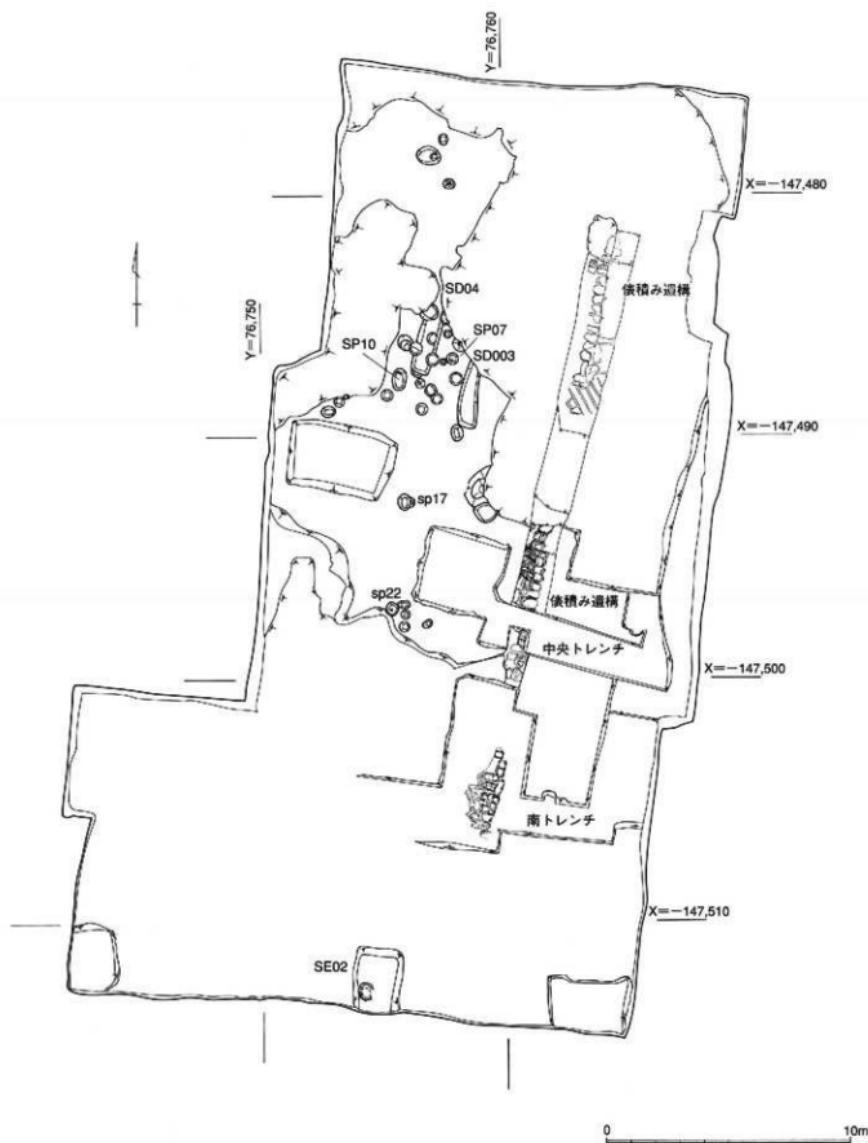


図11 第4造構面平面図 (S = 1 : 200)

○落ち込み

西端で落ち込みの肩を検出した。S X02と重複するため本来の規模は不明であるが、S X02が形成される前から既に下がり地形となっていた可能性がある。15世紀代の備前窯の口縁片が出土しているが、埋土の状況や供伴する一石五輪塔の形態からS X02に伴う可能性が高い。



写真114 落ち込み肩部からの
遺物出土状況 (南から)

○溝

白色砂層の中央付近で溝2条を検出した。

S D03・04、いずれも幅70~80cm、深さ約15cmの規模をもつ。断面の形状は逆台形を呈する。S X01により切られるため全長は不明である。

遺物は土師器皿の小片の出土に留まった。



写真115 S D03断面

また調査区南東で検出した土坑からは、時代のやや下がる土師皿3枚と瓦質の釜形土製品のミニチュアが出土している。墓の整地層を除去した段階で検出したが、全体像は搅乱のため明確ではない。シルト質灰色砂の單一埋土である。上層の墓に伴う遺構か。



写真116 第4遺構面 柱穴、土坑からの出土遺物



図12
第4遺構面出土遺物
のシルエット

1~3はSK302から出土した土師皿で、4は同遺構より出土したミニチュアの瓦質羽釜である。5~6はSP07から出土した土師器皿、7~9はSP17から、10~14はSP10から出土したもので、15はSP22から出土した土師器の鍋片である。

5~14が中世末の土師器皿で、大きなものが径約11cm、小さいものが径6cmである。調整はナデのみである。1~3の底部には回転糸切り痕が残り、胎土も精良である。大きさは前述の皿とほぼ同じである。

○俵積み遺構

第3造構面の調査中、南掲乱際での遺構の残存状況を確認するためにトレンチでの掘削を実施したところ、奇妙な凹凸をもつ木皮状の塊が検出された。湿地状の堆積に含まれる植物遺体層と判断していたが、範囲を広げ、土を取り除くうちに俵が連続して置かれている痕跡であることが判明した。

さらにこの一群を検出した北側の下層確認トレンチでも、断面に梢円形の植物の腐食物を確認した。平面での検出を続けた結果、北側に直線的にのびることが確認された。



写真118
俵積みと
植物遺体層
(南端)



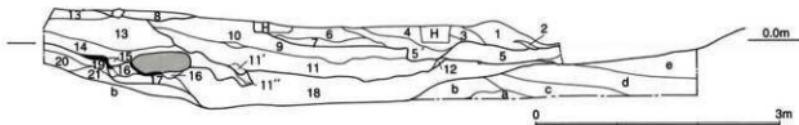
写真119 中央トレンチと俵積み遺構（南から）



写真120 トレンチ断面での俵の検出

調査区内では南北長約25mの俵積みが検出できた。

俵は1段で並べられる部分、2段に積み上げられる部分があり、1段で並べられる俵は1mと大きく、2段に積み上げられる俵はやや小ぶりの60cmくらいの長さのものである。俵の長軸をタテヨコに交互に丁寧に並べて積み上げる部分もあるが、隙間もあり、積み方はマチマチである。



1. 暗灰色粘質土 2. 暗褐色細砂 3. 暗灰色細～粗砂 4. 明灰色シルト 5. 灰色シルト(5'は砂質) 6. 淡灰色シルト(橙化)
7. 青灰色砂質シルト 8. 黄白色シルト～粘土 9. 暗灰色～暗色シルト(泥層) 10. 暗褐色砂 11. 灰色シルト(泥層) 12. 暗色粗砂
13. 暗灰色細～極細砂(13'は土壤化) 14. 灰褐色細～粗砂 15. 灰色細砂 16. 黑色シルト 17. 黑褐色シルト(泥層) 18. 明黒褐色シルト(泥層)
19. 淡黒褐色細砂 20. 黑色細砂 21. 淡黑灰色細～極細砂

a : 黄灰色粗砂 b : 灰青色細～粗砂 c : 灰黄色粗砂 d : 灰色細砂～粗砂(ラミナ) e : 灰白色細砂

図13 中央下層確認トレンチにおける俵の検出

(図中、トーン部分が俵の断面)

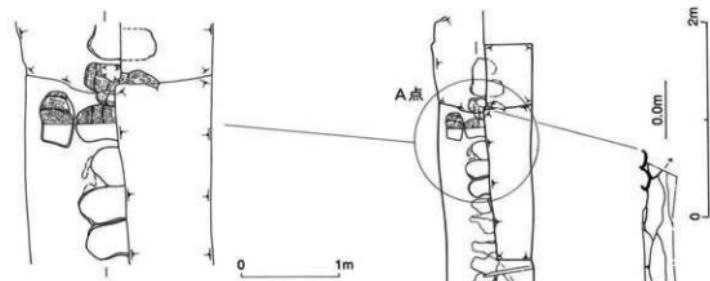


写真121 北側擾乱内の傍積み断面

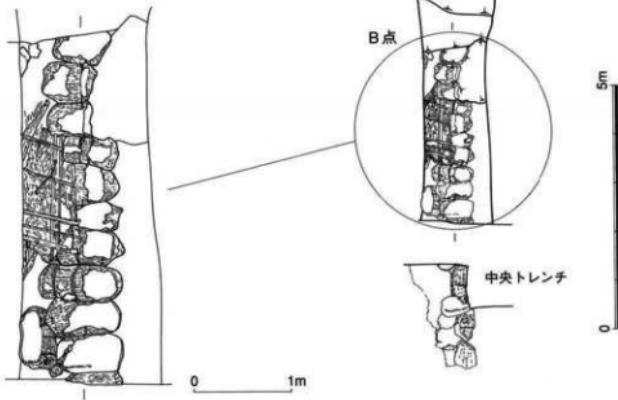


写真122 B点の傍積み近景

図14 傍積み造構平・断面図





写真123 俵積み遺構（南から）

S D02の下層にあたる大きな溝、あるいは湿地状堆積から西側への立ち上がり部分に俵が並べられる。粘土層の堆積が統いた後、整地を行い、墓を築く。墓地の基盤層となる粘土層は自然堆積の上に貼り土を行うものか。

○ S E 02

調査区南側は從前の建物による搅乱がひどく、南壁際に3箇所、下層確認のための試掘坑を設定した。東端と西端の試掘坑では搅乱が深く及び、白色砂とその下でやや大粒の砂の混じる黄橙色の砂層を確認した。

中央の試掘坑も搅乱がひどく、コンクリートの枠が見え、当初、遺構の存在は期待できなかったが、木質が見えたため、拡張したところ井戸枠が遺存する状況が確認できた。井戸は北側に削り貫き材、南側は板材を組み合わせる。底部に一段の曲物が遺存していた。



写真124 S E 02検出状況（北から）



写真125 北側削り貫き材（北から）



写真126 曲物検出状況（西から）

曲物は径約60cm、高さは最大約30cmが遺存する。

曲物の中からは土師器皿、土錘、須恵器甕の胴部が、



写真127 S E 02出土遺物

井戸枠の外からも同一個体の土師器皿の他、黒色土器片、製塩土器片が出土しており、井戸枠内外で遺物を分けたが、搅乱の影響もあり、明確に選別することは困難である。出土土器から平安時代前期の井戸と判断される。近隣で平安期の遺構が確認されたのは初めてである。

また最終遺構面を形成する白色砂からは明確な遺構に伴わらず、13~15世紀代の遺物が出土する。周辺から流れ込んだものと思われる。



写真128 白色砂（下層）に混入する古相遺物

□調査区南半で検出された墓地

第1遭構面と第2遭構面では、調査区の南半で墓地が確認された。埋葬施設の数は100基を超え、すべてを説明することは困難である。代表的なものを列挙し、その様相を概観したいと思う。

墓地内での葬法は大きく2つに分けられる。無処理埋葬と処理埋葬である。前者は容器や土坑に直接埋葬する方法。後者はいわゆる火葬により焼骨としたものを容器に入れ、埋葬するものである。

無処理埋葬の施設には

- ①甕棺
- ②丸桶（早桶）
- ③箱型木棺（木桶）
- ④土葬墓（直葬）がある。

処理埋葬の基本は火葬である。焼骨の容器（藏骨器）では甕が多いが、日用品の転用も認められる。今回の調査では火消壺、灰入れ、火入れ、蛸壺、行平鍋などが利用され、特に火消壺が多い。齒や一部の骨のみを埋葬する分骨行為も、火葬により骨化したものをさらに選り分ける処理が加わる。数例を検出している。

また無処理埋葬ではあるが、従前の埋葬施設に隣接して新たに埋葬を行う場合、骨や容器、副葬品などをまとめる行為が認められる。これら片付け行為も再び埋葬するために手を加える行為（処理）=再葬であり、処理埋葬に近いものであろう。容器に通常より多くの骨が収められる状況や、同じ部位の骨が複数出土する場合が認められる。



写真129 埋葬容器各種

甕、火消壺、葉茶壺、蛸壺、焰燈、行平鍋、灰落し、茶入れなどがみられる。花立や花生が供伴する。

○墓地の形成

墓地形形成以前の地形は、S X01、02及びS D02により東西に下がり地形となっていたことは第3造構面の状況から判断される。この落ち込みを埋めた戻した後、整地を行なう墓地の形成を行っており、その様子は先の俵積み造構を確認したトレンチでの堆積状況からも窺える。

また南西隅の部分では以前の墓地が整理され、墓標や藏骨器、石仏や副葬品が散乱する状況がみられた。

確認できた年号の入る墓標の最古のものは、調査で検出した明暦二年（1656）と万治二年（1659）の2つの記銘のある墓標で、その他寛文二年（1662）、享保元年（1716）とを合わせた3基が調査で確認できた。おそらく17世紀中頃には墓地の形成があったと考えられるが、いずれの墓標も横たわった状態で出土しており、墓地を形成する整地層中、第1造構面上で新たに築かれた墓の下部構造に転用された可能性がある。上層の墓はそれ以降のものであろう。墓坑の堀形は不明なものが多く、第1・2造構面と分けはしたが、構築時の深度により厳密に時期差を反映するものではない。整地層に関係なく新たな墓を築く時の掘削状況で深い、浅いという差が生じている例も認められる。大略としては、今回検出した墓地では、下層では丸桶を中心とした墓地、上層では斐棺、箱形木棺など大型の墓がみられるが、藏骨器が増加し、土層から火葬中心の埋葬地への変化が窺える。

写真130

14号墓



墓坑の底に丸桶の痕跡と漆塗、火消壺を藏骨器としたものが桶の腐食で落ち込んでいる。その上に火消壺や陶製骨壺が埋葬される。



写真131 第1造構面 整然と並ぶ墓と整地土



写真132

南西部整地層内

墓標などの検出状況

明暦・万治、享保銘のある墓標が横たわり、隙間に行平鐵を転用した藏骨器がある。古い墓標を新たな墓の下部構造として再利用した可能性がある。周囲には陶製壺、火消壺などの藏骨器、石仏が散乱する。



写真15 墓標年号拓影 (scale 1 : 10)

1～4 墓標 5 供物台の屋号

○調査区での検出状況—墓の諸相一

多様な埋葬施設とともに副葬品に関しても陶磁器類をはじめ、土人形・面子・ミニチュア製品などの土製玩具が多く出土、他に銅錢・煙管・刀などの金属製品、下駄などの木製品、化粧道具などが副葬されている。被葬者を手厚く葬る状況が認められる。

甕棺

大形の甕は器高80cm、小形の甕は器高40cm前後のものである。大形の甕は棺として使用されるが、小形の甕は幼児用の棺としての使用の他、藏骨器としての使用頻度が高い。

甕棺内にほとんど副葬品が伴わないが、塚形や甕の内部から出土するものがわざかに認められる。その中で80号墓からは土人形、ミニチュア、芥子面、面打、土師皿、銭貨（鉄錢、雁首錢）が出土しており、芥子面の裏面には「かめ」の墨書きがみられる。



写真133 80号墓出土副葬品



写真134 80号墓検出状況

小形の甕の上に擂鉢を蓋として被せ、繋ぎ目を漆喰で固め容器としていた。内部の骨片はほとんど土壌化している。容器の大きさ、副葬品などから、「かめ」という童女の墓と考えられる。丁寧な墓の作りなどから、この童女は裕福な階層の家庭に育ったのであろう。

80号墓は今回の調査の中では特異な例である。その他の甕棺は大形のもので数基が確認されたに過ぎない。

桶棺（早掘）

最も多く検出される埋葬施設である。円形の結構を棺とする。

上層の整地層中で検出される桶棺では、棺材の残るものはない。銅錢や煙管などの金属製品の錯化によりその部分だけ遺存する例やその痕跡を残すものが大半を占める。骨の残るものも少なく、被葬者を知る上で情報は乏しい。副葬品では上層でかなりの土製品が出土する他、銅錢、煙管が一般的であり、下層の棺では土師器皿と銅錢の組み合わせが多い。



写真135

第42号墓



写真136 第42号墓出土遺物

口径11cmの土師器の皿2枚と寛永通宝5枚が副葬される。後出の墓による搅乱のために寛永通宝の数が、いわゆる六銅錢に1枚足りないのだろうか。但し、その他の墓でも6枚揃うものは少ない状況にある。

箱形木棺

板を組み合わせて作る棺である。86号墓では、一辺約80cmの板材を方形に組み合わせる。接合部には鉄釘や木釘がみえる。側板は一段分が残る程度で、容器の高さについては不明である。

この種の施設から出土する副葬品は他と比べその数が多く、また大形の土人形や刀、化粧道具など、生前の埋葬者の生活を偲ばせる副葬品の中でも優品のものが目立つ。墓の上に置かれていたのであろう、石塔の一部が落ち込むなど、他の墓と比較すると裕福な階層に属する人々の墓といえる。

また25号墓は箱形棺ではないが、丸桶の外側に木質の、おそらくは板材が変化した土の痕跡が認められ、丸桶の周囲に木箱状の枠を設けていたと考えられる。墓は崩れやすい砂層面に形成されるため、墓坑掘削時の崩落を防ぐための工夫の可能性もあるが、他の丸桶では近接する75号墓（擾乱の影響によりほとんど痕跡は残らないが）を除いては同様の痕跡は認められず、特別な施工と思われる。

75号墓からは白粉の入った色絵の蓋物や紅の入った銅製容器が副葬されており（成分分析後述）、やはり他の墓に比して優品といえる副葬品が入る。墓の構造も含め、裕福な階層の女性の墓と想像される。

写真137
86号墓



写真138
25号墓
(75号墓の参考)



写真139

86号墓の
出土遺物
上：土製品
下：刀



写真140
刀鉾象嵌部分
拡大写真



写真141 29号墓
笠塔婆の一部が墓
坑に埋まる。



写真142 62号墓
石塔の一部が混入する。



土葬墓

容器や容器の痕跡が認められず、直接、穴を掘って埋葬されたものが3基ほど検出された。上層整地層を除去した段階で検出したが、上面で墓坑の輪郭や施設の存在は確認できなかった。浅い窪みに横臥させ、膝を折り曲げた屈葬形態であったのだろうか。

寛永通宝数枚、ガラス製数珠玉、骨製簪と思われる長さ10cmの棒状のものがそれぞれ供伴するが、1基あたりの副葬品は少ないといえよう。



写真143

隣接する土葬墓

火葬に伴う藏骨器類

重機による盛土の除去後、第1遺構面の検出時から第2遺構面の一部において、火葬骨を収めた藏骨器を多く検出した。



写真144 第1遺構面南東部の藏骨器群（北から）

藏骨器には通常の甕の他に、日常生活において使用される容器の転用も多い。藏骨器として使用された甕のほとんどは丹波で、この他、備前や信楽、施釉陶器がみられる。骨がぎっしり密に詰まるもの、ほとんど入らないものなど様々であるが、小型の容器にはその容量からほとんどぎっしりの状態で骨が入れられるが、大型の甕ではその容量に反して、骨の量は少ない。

藏骨器の検出状況は、従前あった大きな壠形をもつ桶棺や甕棺の上に次々に置かれた状況がみえる。また壠形などは明確でなく、規則正しく藏骨器が並ぶ部分もあるが、容器が入る最低のスペースを確保したのみの場合が大半である。

藏骨器は時代が下がるにつれ、納骨のための専用の容器を使用するようになり、瀬戸・美濃系の葉茶壺の転用が多い。下層で検出した古い墓ほど日用品一婧壺、灰入れなどが転用されるが、中でも火消壺の出土量が群を抜いて多いが、近世墓地では通例の事象である。



写真145

代々の藏骨器



写真146

火消壺の転用

(火消壺の下に

さらに火消壺)



写真147

瀬戸の葉茶壺

出土状況

○豊富な副葬品

今回の調査で検出した墓からは非常に多量の副葬品を検出している。第1造構面を中心に数例を挙げよう。



写真148 墓出土の土製品の数々

土製品、人形・ミニチュア・箱庭セットの出土が目立つ。また芥子面が多いのに反し、面打は少量である。

ここに掲載したものは、今回の調査で出土した土製品の半分ほどの量でしかなく、他にも多量の土製品が出土している。

神仏・人物・動物・器物の土製品、建物や太鼓橋、鐘楼などの箱庭道具、ままごと道具、土鈴などである。彩色や色付けの下地となる胡粉が残るものもあり、一部の人形には黄や緑の彩色も残る。大きさは写真の中の「どんぐり」と比べて下さい。

63号墓

径約60cmの桶棺を埋葬施設とする墓である。すでに桶はなく、その痕跡を留めるのみであり、また人骨もほとんど土壌化した状態であったが、桶底に落ちた頭骨の下から計196個の芥子面が出土した。数個～10個の芥子面を副葬する墓も多く、その状況でも副葬品が豊富と思われるが、63号墓の芥子面は群を抜く数量である。埋葬時の状況は不明であるが、出土状況からは底面に平たく、まとめて置いたものと推測される。



写真149
芥子面
出土状況

芥子面の内訳は神仏像（顔）20、（全身）7、干支14、面子10、陽・陰物10、建物（葦葺農家や門など）5、器物（傘、糸切りバサミ、桶、草履など）39、船・荷車5、魚介類（海老、ヒラメ、鮑、吊り下げられた干物一ひらき）23、野菜・果物（白菜、なす、うり、みかん、桃など）34、その他不明38である。



写真150 63号墓出土の芥子面

78号墓

第1造構面検出の礎石建物南側の一角には、副葬品の豊富な墓が多い。前述の笠塔婆を埋め込んだ墓の上に築かれた桶棺墓からままごと道具が出土している。施釉された鉢や皿と紅皿、緑釉で文様を描いた葉茶壺、底裏に「山笠にト」の陽刻のある擂鉢、摸で作った小槌、貝、掛帳がある。



写真151
出土した
ままごと道具



写真152
78号墓
検出状況

72号墓

建物の西側、通路状の空白地に並ぶ桶棺の1つからままごと道具の甕が出土した。

墓は径約50cm、深さ30cmの円形の土坑状を呈する。土坑底の周囲が僅かに土壌化しており、結い桶が存在した可能性を示す。



写真153 甕の出土状況

ままごと道具の竈は幅11cm、高さ5cm、奥行き6cmで、3つの焚き口をもち、縁軸の施された釜と浅鍋に蓋がセットになっている。非常に精巧な作りである。



写真154 ままごと道具の竈



写真156 錢貨・釘・桶底板に貼り付いた錢

棺材が残らず、その痕跡も不明なものが多い状況では、これらの副葬品がどの位置に、どのような状態で置かれたのか明らかでないが、被埋葬者を手厚く葬るために、生前の愛用の品などが盛んに副葬されたものであろう。その代表的なものは煙管である。羅宇煙管が一般的であるが、ここでは延べ煙管も出土している。竹製の羅宇の残りは悪く、雁首、吸口のみが出土する。象嵌を施したもの、吸口羅宇側の付根に網状の繊維を巻き付けたものは被葬者の嗜好を表すものであろう。



写真155 副葬品から復元した喫煙具
火入れ、灰たたき、火打石の破片はS X01
出土である。火皿が短く、直角に立ち上がる
新しいタイプが主流である。



写真157 念珠(木・ガラス・石製)

今回の調査では、ミニチュア土製品を副葬する墓の多くが、礎石建物の南に隣接する範囲に集中しており、土製品の流行する年代観からすると、後出の墓がこの部分に集中するものとも考えられるが、擾乱を受けずに遺存していた状況の反映ともいえ、一概に扱うことはできない。

下層の櫛棺では六道鏡、いわゆる「三途の川の渡し貨」とされる銭貨の出土が多いが、新たな墓を築いた際や再葬行為の影響からか、6枚に満たない墓が大半である。鎧鏡があるが、副葬用に予め用意されていたものであろうか。

副葬品は伝世する品も多いであろうが、当時の風俗、習俗を反映するものが多いと思われる。その意味では今回の調査により出土した数々の副葬品は、兵庫津のマチに暮らした人々の生活を考える上で重要な発見であったといえよう。

墓副葬品内容物の材料分析

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1.はじめに

兵庫津遺跡の第36次調査では、江戸時代後期の色絵の蓋物（段重？）と青銅製容器が検出された。このうち、色絵の段重（蓋物）内には白色物、また青銅製容器内には赤色顔料塊が残留していた。ここでは、これら内容物を調べるために蛍光X線分析を行った。

2. 試料と方法

試料No.1が色絵の蓋物内の白色物、試料No.2が青銅製容器内の赤色顔料塊である（図1）。分析は、容器内の塊から採取した一部を使用した。

試料は、予めマイクロスコープを用いて撮影した後、新鮮な断面について機場製作所製XGT-5000Type IIを用いて点分析を行った。測定条件は、X線導管径100μm、電圧50kV、電流自動設定、測定時間500secである。なお、定量計算は、標準試料を用いないDP法（ファンダメンタルパラメータ法）で半定量分析を行った。

3. 結果及び考察

図1に各試料の蛍光X線スペクトル図と半定量分析結果を示す。

試料No.1は、鉛（Pb）のピークが顕著に検出され、最大81.06%検出された。その他の元素として、アルミニウム（Al）、リン（P）、カルシウム（Ca）、銅（Cu）、ジルコニウム（Zr）が検出された。このことから、白粉としての鉛白粉である。鉛白の組成は $2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb(OH)}_2$ である。鉛白は、金属の鉛を原料（方鉛鉱PbS）とし、鉛の表面を酢酸蒸気で変化させた後、二酸化炭素に接触させることにより、塩基性酢酸鉛→炭酸鉛として合成する（馬渢ほか、2003）。なお、白粉には水銀から作った輕粉と、鉛から作った鉛白粉の二種類があるが、江戸時代に主に使われたのは鉛白粉である（江戸遺跡研究会、2001）。

一方、試料No.2は、水銀（Hg）のピークが顕著に検出され、最大98.90%検出された。その他の元素として、カルシウム（Ca）と銅（Cu）が検出された。水銀朱の組成はHgSである。朱は天然鉱物として得ることができ、中国では辰砂と呼んでいた。古くは丹砂と呼ばれ、特に辰州に産出するものが優品であるので、辰州の丹砂なので辰砂だといった（馬渢ほか、前出）。なおイオウSiは、水銀のピークと重なるため検出されていない。

4. おわりに

分析の結果、色絵の蓋物内の白色物が白粉としての鉛白粉であり、青銅製容器内の赤色顔料塊は水銀朱であった。色絵の蓋物内の白色物が白粉であったことから化粧道具が副葬されたことが明らかとなった。

引用文献

- 馬渢久夫・杉下謙一郎・三輪嘉六・沢田正昭・三浦定俊（2003）文化財科学の事典、522p、朝倉書店。
江戸遺跡研究会（2001）図説江戸考古学研究事典、459p、万葉社



写真158 第1遺構面南半墓地検出状況

写真手前の黒色の土の横にみえる墓坑が参考とした25号墓。複雑されずに残った突出部の向こう側にみえる大形の墓坑が、分析試料の出土した75号墓である。



写真159 化粧道具

墓から出土の紅皿は、ほとんどが型押し成形のもの。簪、餐盤、鉄鑓（おはぐろ）壺はS X01に投棄されたものである。中央の紅皿は第33次調査の出土品で、「京祇園小町紅 みの吉」の銘がある紅猪口である。「小町紅」は当時の紅のブランド品で、「みの吉」は18世紀の京都のいわゆる「お店案内」に記された「みのや吉郎兵衛」店を表すのだろう。

化粧道具は当時の流行、風俗を反映する遺物である。



写真160 蓋物内

白色物

〔試料No.1〕



写真161

銅製容器内の

赤色顔料

〔試料No.2〕

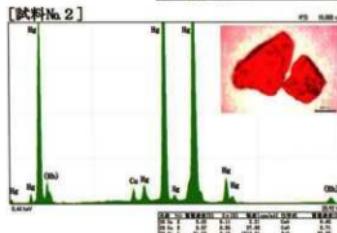
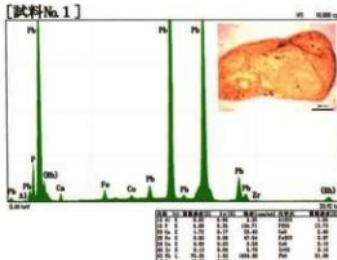


図1 各試料の蛍光X線スペクトル図と半定量分析結果

〔試料No.1〕：色鉛の設置（蓋物）内の白色物

〔試料No.2〕：青銅製容器内の赤色顔料塊

図16 試料解析データ

□ まとめ

今回の調査から

今回の調査では、様々な遺構や遺物を検出し、近世～近代初頭、中世末、古代の各期における当該地の様相を考える上で十分な成果があった。その要点を挙げる。

①昭和38年までこの地にあった長楽寺の前身建物と考えられる礎石を配する基壇を検出した。建物の南側に基壇が形成され、多くの埋葬施設と副葬品の出土をみた。

②建物及び基壇が形成される以前の面で、多量の遺物を含むゴミ穴を検出した。S X01（規模が大きく、穴とするよりは落ち込みを投棄坑に利用か）からは土器や陶磁器などの供膳具、焜炉などの調理具が多量に出土し、その他に鉄滓や石屑、木屑など各材質を加工する工程において発生する屑を投棄した痕跡が確認された。周辺の状況や様々な生産活動があったことを示すものである。

③調査地の東側は幅広の溝、あるいは落ち込みになることが判明した。落ち込みの西側下層で検出した俵積み遺構は、護岸施設と考えられる稀少な例であろう。遺構に伴う明確な遺物はなく、構築時期は不詳といわざるを得ないが、湿地状の堆積には中世末の遺物しか含まれず、層位的には中世末～近世初頭の遺構の可能性が高い。

④平安時代前期の井戸の検出により、当時の海岸付近に位置する当調査区周辺に同時期の遺構が広がる可能性が高くなっている。約500m南へ下がった第32次調査地点で確認された奈良時代後期～平安時代に機能する溝に続く段階の遺構であり、また最終遺構面を形成する白色砂層には、古墳時代の須恵器、中世の土師皿が多く混入しており、近辺に「大輪田泊」などの兵庫津跡における古段階の遺構の存在も想定される。

近世の遺構・遺物について

以上が今回の調査結果で特筆される事項である。次に第1～3遺構面において検出した近世の遺構について、簡単にその状況、土地利用の推移などを辿ってみる。

まず中世末の遺構面と重複する白色砂層、下がり地形の端部の茶灰色砂層に遺構（第3遺構面）が構築される。東側にS D02、西側にS X02の2基の落ち込みがあり、南東部には丸桶を埋葬施設とし、副葬品を含まないか、出土しても銅銭や古手の煙管のみが入るやや古相の墓群

が形成されはじめめる。そして北側に大きなゴミ穴、近接して鋳造炉のある作業空間が広がっていたと思われる。茶灰色砂層には近世の遺物は含まれず、東西の落ち込みの堆積下部から17世紀後半～18世紀の遺物が出土している。これらの落ち込みがほぼ埋没した段階、18世紀の中頃に最上部に粘土を貼った整地を行い、南側は墓地としてその範囲を括げ、機能するようである。

一方、北側ではS X01上層からの出土遺物は18世紀後半から19世紀代のものが主となっており、南半の墓地と共に存する時期があったようである。花立てや破損した土人形などの出土状況がこれを肯定するであろう。S X01の埋没後、基壇の形成、建物の造営により今回検出の寺の体裁が整いはじめる。これが19世紀中頃かと思われ、北側に建物、南側に墓地という景観が形成されるようになる。現住職のお話では今回検出した基壇附近に建物があった記憶はなく、先代の時代にもなかったとのことである。現場で確認した最上層の整地層の状況から大正末～昭和初期に堂宇の移転があったものと考えられる。

兵庫津を描いた絵図との比較から…

近世の兵庫津を描いた絵図は今とのところ数点の存在が知られている。江戸時代前期に描かれたとされる屏風も存在するが、平面的な空間配置を知る上では絵図の存在が欠かせない。最も著名な元禄絵図は、兵庫津を描いた最古の絵図であるとともに、真光寺や柳原懇門、兵庫城などポイント的な調査事例で得られた成果は現在の地図と合致し、高い精度をもつことが判明している。



図17 元禄絵図からみる今回の調査地

（神戸市史附図に加筆）

これ以降の兵庫津を表す絵図は、尼崎藩領から幕府領

へと移行（上知）する明和 6 年（1769）の絵図に準じている。明和 6 年絵図に表された兵庫津の姿は、尼崎藩領期の兵庫津の最も完成された姿であったとされる。古文書からは上知前から町場が海沿いに伸張する様子が窺え、海岸部の埋め立てによる町場の拡張が時代を追うごとに規模を増すことは、その後の絵図からも読み取れる。

一方で、調査地附近では都賀堤が西側へ後退し、堤外側にあった畠地が町場となる様子が確認できる。18~19世紀にかけては、西国街道沿いの空白地に徐々に町場が形成される様子が窺え、調査により出土した大量の遺物はこれらを裏付けるものであろう。

当該地における長楽寺の推移は、神戸市立博物館所蔵「元禄五中年大坂御番所江差出候寺社員數御改帳之写兵并右以来再建新建二付間数相違之分ノ図委細改帳」より 18世紀中頃までの様子が窺い知れる。この文書は寛延元年（1748）、圓方惣会所が記したもので、元禄 5 年（1692）に大坂町奉行所へ提出された寺院の規模や堂宇数などに関する書類の写しと、寛延期に至る経緯を書き留めたものである。長楽寺の項では①開基は延慶元年（1308）とあるが元禄期までは不詳。②元禄 5 年段階は無住、西に位置する万福寺支配であったが、長楽寺除地として堂、鎖守、馬場、敷地の規模が記載される。③元禄 8 年（1695）に住持但阿弥と記載され、同 10 年（1697）、壱丁半南の畠地内に同規模での替地が認められる。本堂に加え、庫裏と 4 棟の塔頭再建の記載があるが、新建であった模様。その後、享保 8 年（1723）、延享 4 年（1747）に庫裏などの修復、北の方御土手（堤の痕跡か）を併借地とする旨が記される。④寛延元年の敷地規模は東西 28 間、南北 21 間で、元禄期に同じである。（大略）一元禄 10 年以降、一ヶ寺として発展し、絵図の表現からは 18~19 世紀、特に 19 世紀後半における寺院の繁栄が推測される。

元禄絵図と明和 6 年、安政 4 年（1857）の 3 点の絵図（図 18）により 17 世紀後半、18 世紀後半、19 世紀後半における調査地周辺の土地利用の様子が窺える。

長楽寺の名は明和の兵庫津絵図よりみられる。先述の文書からは元禄 8 年頃には堂宇があったようだが、元禄絵図の作製段階では反映されなかったのであろう。

今回の調査では、17 世紀後半の墓標や一部の墓の年代

が 17 世紀代と考えられ、調査では堂宇の検出はなかった。この時期には都賀堤が調査区内の南東隅を斜めに横切る形で絵図には描かれ、検出した東半の溝や湿地状の落ち込み、S X01 の下層も湿地状を呈することから、俵積み造構が都賀堤の時期の畠側の護岸施設か、またはこれを継承する施設であった可能性が高い。そうであれば兵庫津遺跡における重要な遺構の発見といえよう。この輪郭は明和 6 年絵図での堤の表現、安政 4 年絵図の溝の末端の表現に継承される。寺域内の状況は絵図からは明らかにできないが、堂宇の建立が調査区に及ぶまでは、墓地や鍛冶場、ゴミ穴のみが築かれ、それら遺構の性格から、長らく寺域の端に位置する場所であったと考えられる。

元禄 9 年（1696）



明和 6 年（1769）



個人蔵
神戸市立博物館寄託

安政 4 年（1857）



神戸市立博物館蔵

図 18 兵庫津絵図にみる

調査地周辺の変遷

また調査地附近は万福寺、柳原天神社、能福寺、真福寺、そして長楽寺の接点となっており、町場の形成は、これら寺社と無関係ではないだろう。同一器種が目立つ陶磁器や鍛冶などの生産活動の痕跡は、これら寺院や西国街道沿いに発展した町場において大量に消費されたものと思われ、江戸時代後半の寺院とその周辺の状況を想像する上では十分な成果であったと考える。

あとがき

今回の調査は非常に短期間で実施した調査であり、從前建物による搅乱の影響も大きく、層位的に全体像を把握することが困難であったことや、すべての出土遺物を詳細に検討する余裕のなかったことが心残りであるが、兵庫津遺跡の中で近世寺院という調査例の少ない遺構が確認できた点、多量の遺物の復元から、生活に供する様々な種類の道具の使用が判明したことが最も大きな成果であったと思われる。

○主な参考文献

- 2001 江戸遺跡研究会『国際江戸考古学研究事典』
2000 江戸遺跡研究会『江戸文化の考古学』
2002 古泉 弘『地下からあらわれた江戸』
2004 神戸市立博物館『特別展 よみがえる兵庫津』
—港湾都市の命脈をたどる—
1984 佐賀県立九州陶磁文化館『国内出土の肥前陶磁』
1988 『古伊万里』別冊太陽No.63

報告書抄録

ふりがな	ひょうごついせき だいさんじゅうろくじ はっくつちょうさかいようほうこくしょ						
書名	兵庫津遺跡第36次発掘調査概要報告書						
調査名	兵庫区北逆瀬川町におけるマンション建設に伴う						
著者名	藤井太郎(編)・中村人介・藤根 久						
編集機関	神戸市教育委員会						
発行機関	神戸市教育委員会						
所在地	〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL.078-322-6480						
発行年	西暦2006年3月31日						
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査面積(m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号				
ひょうごついせき 兵庫津遺跡	ひょうごけんこうべし 兵庫県 神戸市 ひょうごくきたきかせがわちょう 兵庫区北逆瀬川町 いっとうめ 1丁目	28105	24	34° 39' 52"	135° 10' 26"	20050214 ~ 20050403	800 延べ 3,200 マンション 建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
兵庫津遺跡	集落址	平安時代 中世 江戸時代～明治時代	柱穴 井戸 俵積み(護岸)遺構 礎石建物・基壇・墓地	須恵器・土師器 陶磁器 金属器・木製品			

兵庫津遺跡第36次発掘調査概要報告書

兵庫区北逆瀬川町におけるマンション建設に伴う発掘調査

2006. 03. 31.

発行 神戸市教育委員会文化財課

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

TEL. 078-322-6480

印刷 福田印刷工業株式会社

神戸市東灘区魚崎西町4丁目6番3号

TEL. 078-811-3131

神戸市広報印刷物登録 平成17年度第309号 (広報印刷物規格 A-6類)